或人かたられし、今の世、をうなのさすかんざしは、享保のはじめまではなかりけりとぞ、それよりかんがふるに、繪草紙などを見るにも、その頃まではかんざし髪搔のたぐひをすべてさゝず、ゑかればちか比の物なるべし、

〔歴世女裝考〕今の如く簪をさしたる起原

寛永以來寛文の末まで、五十年ばかりの間の畫軸板本のるゐの女繪どもには、首飾一品もみえず、延寶、天和、貞享、元祿、此間三十四年、菱川師宣が繪本あまたあれど、遊女すら髪のかざりなし、櫛はさしたる事、書にはまれにみえたれど、繪にはみえず、貞享五年板、此年元祿と改元好色盛衰記卷三に、今の女、むかしなかつた事どもを仕出し、身をたしなむ物道具數々なり、首筋より上ばかりに入用の物ども十六品あり、まづ髪の油、髩付、長かもじ、小まくら、平髩ひらもとゆい、ゑのびもとゆひ、かうがい、さし櫛、まへ髪立、紅粉、白粉、齒黑、きはずみ、おもり頭巾、留針、浮世つゝら笠、あらましさへ此通りぞかし、かくかぞへたてし中にも、かんざしはいはず、然ども是より二年前、貞享三年板一代女前なるも此書も大坂の板卷三に、琴のつれびき遊しける時、かの猫をゑかけけるに、何の用捨もなく奥樣のおぐしにかきつき、かんざしに小まくらおとせばとあり、おもふにこゝにかんざしといひしはめづらし、此書は、一人の女、さま〳〵に世をわたる一代を ゑるしたる物なれど、全部五冊の文中、此一本のかんざしのみにて、さし繪にもかんざしみえざれば證と ゑがたく、此後廿七年たちて、正德三年板、本朝廿四貞卷三辻にて、益踊の所、現をぬかし、心をうかして踊る子どもの、さし櫛かんざし、首に掛たる丹前帶とあり、おもふに踊に出る乙女ゆゑ、常にはさゝぬ櫛もかんざしも、さしかざりつらん、ゑか思ふよしは、正德六年板とある此年享保と改元繪本園若草京板、大本全三冊、西川祐信筆に、あまたの婦女を畫たる中に、櫛笄はのこらずさしたるさまをゑがき、かんざしさしたるは四人みゆ、○中略寛永の比及より元祿中まで八十年ばかりの間、江戸にて上梓の浮世草子は甚稀也、○中略ゆゑに前にあげ